

令和5年度小松市立国府中学校 学校評価 1 (年度末)

めざす児童生徒像

- ・互いを認め、尊重し合い、互いに高め合う生徒
- ・意欲を持ち、主体的・協同的に活動する生徒
- ・互いの考えを、正しく伝えあい、聴き合える生徒
- ・集団の規律やマナーを守り、場に応じた行動ができる生徒
- ・健康や体力増進に努め、心身ともに健やかな生徒

※児童生徒結果-教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間				年度末				達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)		※差	数値・アンケート結果 (%)		※差				
				教員	保護者		教員	保護者					
(学校重点項目)	学校重点項目	①②の教員アンケート結果が80%以上になる。	① キャリア学習として、自己理解の時間、将来の夢や目標など未来を考える学習を推進している。	100			100				①～③の項目において、校長ビジョンに基づき、各担当からの提案を全教員で意識し取り組むことができています。 特に①②について、講師を招いての生徒の自己理解を進める取組、またkokuhuトーク等、生徒が主体的に対話する取り組みを積極的に推進することができた。	①～③肯定的回答には「どちらかといえはしている」という回答も含まれる。より積極的に取り組みが進むよう、共通認識を深め実践につなげる。 対話的な取組が成果を上げているが、慣れから漫然としたものにならないよう内容や実施頻度など検討する。	
			② 学級会、kokuhuトーク、国府の集いの定例化など、主体的・対話的な活動の充実を図っている。	100			100						
			③ 授業を含め様々な教育活動の中で、生徒指導の3機軸を生かした取り組みを実践している。	100			100						
			集計										
重点項目	働き方や業務の改善	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	100			100				①については、職員室内の時間外勤務の削減の意識は高く、良い風土ができています。ただし80時間越えの職員は未だゼロではない。 ②について、学校規模が小さく、必然的に一人当たりの校務分掌が多くなっているが職員間に協力的な関係ができており、負担感が少ない。	①引き続き、業務、行事内容の精選を進める。負担感の多い校務には複数配置するなど、業務の平準化を図る。また年間の授業時数を確認しつつ、学期末短縮等、繁忙期に職員が授業以外の業務を進める時間を確保する。		
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができています。	94			83						
			集計										
			集計										
小松市共通重点項目	学校研究	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100			93				①②の項目において、校長ビジョンに基づき、研究部またGIGA推進担当からの提案を全教員が前向きに捉え、取り組むことができています。 定期的な教科部会を開くことで、目指す姿を統一させることができています。	研究主題を自分事として捉え実践につなげられるように、全員参加の分析等、継続してPDCAの持ち方を工夫する。 日常的な取組や生徒情報の交流などを大切に、組織全体で取り組む風土を育む。		
		② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語り、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100			100							
		集計											
		集計											
	指導力の向上	改善	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	87	92	5	100	96	-4	全般的(①～⑥)に、肯定的数値が中間よりも向上している。対話的な取組が教科横断的に取り組まれていることが改善につながっている。生徒が自信をもって発言をする場面が増えてきた。また生徒自身も成長を実感していることがアンケートにも表れている。 全体的に他者と話すことへの抵抗感は減ったが、その内容がまだ浅いこと、また苦手な生徒も少なからず存在することが今後の課題である。 ⑤「振り返り活動」について、一学期の検証から二学期は重点的に取り組んだ結果、数値に向上が見られる。 ⑥各学期において、GIGA強化月間としてICT活用を推進する期間を設け、全職員で取り組んだ。授業における学習用端末の活用場面は増加している。	①～④授業、行事、集会等において、話し合いの場面をこれからも積極的に仕掛ける。 ②③④話し合いの質の向上のために、教師の発問や問いかけの技量を校内研修会や教科部会を活用して向上させる。 教科書を活用しつつ、実生活に即した身近な課題等を取り入れ、興味関心の向上、また多様な考え方の育成を図る。 次年度は、学校全体の課題を生徒目線で作る取組を実施予定である。 ⑥学習用端末の日常的な利用は進んできている。学びが深まるように、より効果的な活用を図る。		
			② 児童生徒は、学級の友達と間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	100	91	-9	100	97	-3				
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	87	91	4	93	90	-3				
			④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	87	95	8	100	97	-3				
			⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	87	88	1	93	94	1				
			⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	93	94	1	100	92	-8				
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100			80			①②教員間の交流も活発で、職員室内での対話や授業見学などから、他教科との関連を意識する教員が多い。反面、自身の教科に精一杯という意見もある。 ③学校の教育目標の共通理解のもと、共通実践を行うことができています。 ④一学期は新入生の授業参観と情報交換、小学校の公開授業を中学校教員が参観。二学期には小中サミットが実施され、各校の発表で互いを知る場面が設けられ、交流を深めた。また教育会において情報交換を進める等、小中連携を進めることができた。	①②③親和的な職員室風土のもと、学校研究部より示された重点取り組みの実践を、今後も全教科で意識して行う。 校内研修会等の充実により全職員が納得の上に取り組めるようなPDCAを推進する。 3学期に全職員が参加し、次年度に向けて学校の課題を共通確認する取り組みを計画している。 ④研修会等で得た情報を学年会や教科部会で共有し、個々の実践につなげる。		
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	94			87						
			③ 全職員が学方向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	94			94						
④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)			69			80							
集計													
家庭学習	家庭学習	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100	71	-29	73	73	0	家庭学習については、学年ごとの実情に合わせて課題の持ち方を工夫している。 家庭学習の充実が課題である。「量や質を高める工夫」と「過度な負担とならない配慮」等、そのバランスが難しい。	学年生徒の実情に合わせ、内容や量が過度な負担とならないよう、家庭学習の課題設定を工夫する。「自ら学ぶ(家庭学習)」ことの意義の理解を深めるキャリア教育を充実させる。			
		② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	76	54	-22	73	53	-20					
		集計											